

# コロナ禍において奮闘する 先生方のためのオンライン・リレー講座

京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM は、広く教育に関心を持っている人びとが集まり、ともに語り合うことを通して、お互いの教育力量を向上させることを目的とした「広場」です。新型コロナウイルス感染症の影響により、社会環境の変化、オンライン授業の実施、子どもたちへのケアなど、多くの先生方が今まで経験されたことのない状況のなかで奮闘されていることと存じます。E.FORUM では、そのような先生方のお悩みを少しでも解決できないかと考え、オンラインによるリレー講座を企画いたしました。先生方のご参加をお待ちしています。

**日程** 2020年 7月5日(日)、19日(日)、8月2日(日)、16日(日)  
14:00～16:00

**対象** 学校・教育委員会の関係者、教員志望の学生

**定員** 300名程度

**受講料** 2,000円(税込)/回 ※クレジットカードのみ  
本学都合以外での入金後の返金は一切できません。何卒ご了承くださいませ。

**環境** ZOOMによるオンラインライブ配信  
(インターネット環境が必要です。データ容量 1GB程度)

**共催**

京都大学大学院教育学研究科  
教育実践コラボレーション・センター  
京大オリジナル株式会社

**申込先**

<https://www.kyodai-original.co.jp/?p=7791>

**申込締切**

各回 1週間前(日曜)まで  
(定員に達し次第、締め切ります)



**問合せ先**

京大オリジナル株式会社 研修講習事業部  
Tel: 075-753-7778  
E-mail: kensyu@kyodai-original.co.jp

## プログラム

	日程	テーマ	講師
第1回	7月5日(日)	「子どもたちの学ぶ権利を保障するとはどういうことか —with コロナの中で—」	石井 英真 准教授 京都大学大学院教育学研究科
第2回	7月19日(日)	「コロナ禍において求められる批判的思考力」	楠見 孝 教授 京都大学大学院教育学研究科
第3回	8月2日(日)	「コロナ禍における心のケア」	西 見奈子 准教授 京都大学大学院教育学研究科
第4回	8月16日(日)	「コロナ禍におけるカリキュラム・マネジメント —パフォーマンス評価をどう活かすか—」	西岡 加名恵 教授 京都大学大学院教育学研究科

14:00～14:10 オープニング

14:10～15:00 講演

15:00～15:10 休憩

15:10～15:30 ブレークアウト・セッション

15:40～16:00 質問に対する応答

### ◆ご注意ください

- 開催4～5日ほど前に視聴用アドレスをお知らせします。
- 受講対象以外の方(企業の方など)は、ブレイクアウトセッションにはご参加いただけません。予めご了承ください。
- ZOOMの仕様や使い方に関するお問合せにはお答えいたしかねます。
- お客様の環境等が原因で発生した、視聴できないといったトラブルに関しては個別の対応や返金等とはごできません。予めご了承ください。

2020年7月5日（日）  
京都大学大学院教育学研究科  
E.FORUM全国スクールリーダー育成研修  
「コロナ禍において奮闘する先生方のためのオンライン・リレー講座」@京都大学

# 子どもたちの学ぶ権利を保障するとはどういうことか —withコロナの中で—

石井英真（京都大学）

# 自己紹介

- 専門は教育方法学（学力研究）＝学校ですべきこと、できることについて原理的・実践的に探究（教育的価値論）
- 授業という営みへのこだわり＝ブルームの目標分類学と斎藤喜博の教育美学との間（教育技術論）
- 専門医であると同時に町医者でありたい＝授業改善を軸にした学校改善の取り組み（学校改革実践）

## 【主な著書】

- 石井英真『増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2020年。
- 石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。
- 石井英真『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン（仮）』日本標準、近刊。
- 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。
- 石井英真編『授業改善8つのアクション』東洋館出版社、2018年。
- 石井英真監修・太田洋子・山下貴志編著『中学校「荒れ」克服10の戦略—本丸は授業改革にあった！』学事出版、2015年。
- 石井英真・熊本大学教育学部附属小学校『粘り強くともに学ぶ子どもを育てる』明治図書、2020年。
- 石井英真「教師に求められる学びとは—教師による教師の成長のための実践研究」大阪府教育センター『高等学校における校内授業実践研究進め方ハンドブック』2020年。（[http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/pdf/kounaijyugyoujissenkennkyuu\\_ver\\_3\\_r2.pdf](http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/pdf/kounaijyugyoujissenkennkyuu_ver_3_r2.pdf)）
- 石井英真監修・長瀬拓也・秋山貴俊編『ゼロから学べるオンライン学習』明治図書、近刊 など多数



# コロナ禍が投げかけているもの

- ▶ コロナ禍で新たに課題が発生したというより、これまでの授業や学校の課題が顕在化している。
- ▶ オンライン学習で問われているのは、テクノロジーの質以上に、授業観である。
  - = 「授業を進める≠学びを保障する」「授業を届ける≠学びを支援する」、学習者目線で考えられているか？ 形だけのアクティブ・ラーニングであったことのもろさ。
  - ドリル的な課題を渡し音沙汰がない、動画を作っても、演出入りの解説的なもの。
  - オンライン授業も、大規模化した講義で進め、生徒たちが席についているかを監視しながら、結果をテストで点検する。
- ▶ 現時点では、タブレットの未整備、家庭の情報環境、各自治体の回線のキャパや閉鎖的で内向きのシステムにも由来する、ハードな条件面の問題が注目されがち。しかし、それらは予算や時間はかかるが、いずれある程度は克服されていく。より深刻なのは、できるところから始めようとしても、何か一つ問題が起こったら、その選択肢を放棄する。つまり、挑戦のためのリスクを取らない、というか取れなくなってしまった、コロナ以前から続く学校の萎縮と硬直化。これらは、時間だけでは解決しがたく、学校に本当の意味での挑戦の自由が担保されないと難しい。

# 学ぶ権利を保障するとはどういうことか？（遠隔と登校）

自習的にドリルを解いて進め、最終的に、テストで結果を確かめられれば、それで学びを保障したこととみなしてよいのか。あるいは、とにかく双方向に近い形で授業を提供できさえすればよいのか。

- ▶ 生活リズムを乱さないためにも、オンラインコンテンツを届けたりしつつ、子どもたちが学習計画を立てることを支援したり、通信添削のように、課題とフィードバックと学び方支援のシステムを確立したりする。それらをつながりと心の通い合いとして遂行するなら、勉強は宛名を伴って文脈化され、子どもや教師、さらには保護者の「こころの温度」も上がり、「学び」化される。
- ▶ 子どもたちがこの生活の中で何を感じ、何を体験しているのか、それを日記のように綴り、言語化してクラスメートと共有したりする中で、経験は意識化され「学び」化される。それは、生活科、理科、社会科、あるいは、総合学習や特別活動の担ってきた役割を補うだろう。なお、家庭生活が「学校化」されつつある状況で、生活経験とその言語化の機会を学校において展開することは、生活者の視点から学校での学びを「非学校化」すること（教育臭さを問い直すこと）にもつながるかもしれない。
- ▶ 自習勉強と生活経験を「学び」化し、学びの勘と思考の体力を鈍らせず、つながりを温める工夫を進める。そして、それらを土台として、登校時には、たまの再会を味わいながらも、学びをさらにつなぎ深め、さらには一人一人の子どもたちにおける学んだことの習熟・定着（「学力」保障）につなげる。
- ▶ つなげ深める上では、家庭での自習で進めてきたことを、立ち止まって考えなおしてみる、そのように問い深める機会が重要（できているつもり、わかっているつもりをゆさぶること）。また、オンラインでは見えにくい、学びの手元を確認し、個々の学習課題の達成や学びの経験を線でつなぎ、立体的に積み上げていく上で、ポートフォリオ的にノートを活用し、その指導から学びの定着につなげていくことが重要。さらに、遠隔にすると生じやすい格差を少しでも縮小する上で、学習の遅れが生じがちな子どもたちに対する、少人数での手厚いフォローがなされる必要がある。

# 学ぶ権利を保障するとはどういうことか？（学校再開後）

そもそも学びの遅れとその回復とはどういうことか。授業を進められてないのが「遅れ」であって、国がこれでごなしたとみなす年間指導計画を示してくれたら、それを遂行して「回復」したことになるというのでは、形骸化した履修主義と言わざるをえない。

- ▶ 授業を通して、何がどのような形で身についていれば学んだといえるのかという問いに向き合い、学習成果に注目してそれをちゃんと保障していく修得主義寄りで考えていくことは必要である。
- ▶ 修得主義が、結局はペーパーテストの問題が解ければよいと、問題を解いて進めることに陥るのには注意を要する。また、どの子ども落ちこぼさないという大人たちの覚悟なしに、進められる子は自由にどんどん進めたらよいという点のみが素朴に強調されると、学力格差や学びの分断につながりかねない。
- ▶ 休校明けに、成績づけに関係しないことを伝えた上で、診断的・形成的評価のために、子どもたち一人一人の学習状況を確認する作業は一定必要だろう。その時、問題が解けたかどうかだけを診断的に評価するのでは、子どもたちの隠れたニーズを見落とすことになるかもしれない。手厚くフォローされるべきは、意味や学び方のつまずきであって、学校でみんなで生活しながら学ぶ授業が力を持つのはこの点においてである。
- ▶ 休校中に、生活が乱れたり、ケアされない状況が深刻化したりしている子どもたちもいる。教科等横断的にカリキュラム全体を見直す際には、子どもたちが学校という場をどう経験し生きているか（生きられたカリキュラム（curriculum-as-lived））にも思いをはせ、パブリックなつながりの中で、ほっとできる空間の中で、知的で文化的な生活のリズムを保障していく視点も必要である。つながりと生活の中で長いスパンで学びと成長を保障していく、履修主義のエッセンスを生かしていくわけである。



# 「こころの温度」を上げる授業を①

- ▶ 授業は最大の生徒指導や荒れ対策だと言われたりするが、まさに今この点を確認しておく必要がある。授業を進めないといけない、子ども同士のやりとりも難しいということをお口実にして、ただ先生が一方向的に話すだけであったり、問題を解いてこなすだけであったりする授業になっていないだろうか。教科書すら開けずに、ノートに思考をまとめることもせず、すなわち、意味理解や思考を深める活動などを省略して、漫然とただプリントを穴埋めするだけの、ワクワク感も彩もない文字通り無味乾燥な授業になっていないだろうか。
- ▶ 教科の内容の本質を見極め、子どもの生活と結びつけ、手持ちのツールを最大限に生かすところに、ちょっとした工夫であっても、彩のある授業が生まれ、子どもたち、そして教師の「こころの温度」も上がる。

## 「こころの温度」を上げる授業を②

- ▶ 長い休校を経て、みんなが学校に戻ってきて、特に授業の場面で、学校や教師のみならず、子どもたち自身がいろいろと自己規制している部分もあるように思われる。たとえば、授業で教師が笑いをとることをためらうだけでなく、子どもたちの方も、笑ってはいけないと思っていたりする。「そこは笑うところだよ」とちょっと投げかけるだけで、にこっとする笑顔が教室に戻ってくるかもしれない。心に余裕がない中で教室から笑顔が消えていないか。ヤマ場もなくただこなすだけで、子どもたちもなんとなくぼけっとしてけだるい授業になっていないか。子どもたちの頭と心を動かすような、ピリツとした、学びに向かっているいい意味での緊張感と、ほっとして笑顔がこぼれる瞬間がある、そんな教室空間をつくっていけるとよいだろう。
- ▶ もともと日本の教師たちは、徳育と知育を機械的に切り分けず、学級をつくりつつ、授業をつくってきた。今こそ、つながりづくりの延長線上に、内容を伴いながら、学びと学力を保障し、そこからさらなるつながりを生み出していくことが、言い換えると、学びとつながりを往還させつつ、経験を「学び」化し、人間的成長につなげながら、一人一人の中に「学力」化させ力をつけていくことが求められている。



# 第二波、第三波も見据えて、学びを保障し続けるために備える①

- ▶ 学校再開に向けた動きの中で、休校期間中の出来事や、オンライン授業などもなかったことのように、コロナ以前に戻ろうとする動きも見られる。しかし、ここで備えを怠り、次の感染拡大で同じように学校が身動きが取れない状況に陥ったりすることに対して、ストレートな言い方をすれば、保護者や社会からすると「次はない」という気持ちなのではないだろうか。オンラインでつながっているのが当然でそうでなければ批判は免れない、次の局面はそのような状況になるだろう。
- ▶ 三か月間の休校期間にオンラインの取り組みが進まなかった原因は、現場の不慣れ、家庭のネット環境や機材の不足以上に、特に公立学校に関しては、自治体単位でのシステムのキャパや、学校の外に端末も持ち出せず、極めて不自由で内向きな情報セキュリティポリシーなどの障壁も大きかった。閉鎖的で内向きなシステム構築のベクトルを、一般社会での通用性を高め、教師の在宅勤務等も可能にする方向へと転換していくことが必要である。
- ▶ 各学校において、教師たちも、いろんな場面でICTをいじってみる機会を増やすことが重要である。この状況で、無理にオンライン授業をやるのは難しくても、全校集会などを、学内でオンラインでやってみてもいいだろうし、特に、生徒会活動や行事などの自治活動においてこそ、子どもたちに委ねてみれば、彼らの方が自由に機器やツールを使いこなして、新しい取り組みを進めてくれるだろう。そこから教師が教えられることも多い。オンラインでの課題や連絡事項などのやりとりを始めていたのであれば、家庭との連絡などに継続して使えばよい。まずは家庭との連絡ツールとして、アカウントの発行やテレビ会議システムに慣れるための練習を行うなど、とにかく、少なくともオンラインのつながりを、学校生活の中や家庭との間に通わせておくこと。一度通わせておけば、いつでも立ち上げられる。

## 第二波、第三波も見据えて、学びを保障し続けるために備える②

- ▶ ICTをいじってみること。車でもゲームでも携帯でも、なんでもいじっているうちに身につく。遊び感覚で使うという点からすると、試しにオンライン懇親会でもやってみる、そんなところから始めてみるとよいだろう。教職員同士で、あるいは、学校運営協議会で保護者や地域の人たちも交えたりして。やってみると、なんだこんなものかと気づくはず。懇親会なら、失敗も許されるし、勢いでいろいろとボタンをいじってみて、そこから気づくこともある。
- ▶ ICTの活用については、その実践やツールの紹介が過度に「未来形」のテンションを装っているために、機械に弱い人には遠いもののように感じて、それが取り組みを躊躇させてしまっているところもあるように思う。しかし、実際にやってみると、少なくとも一般向けのツールについては、ユーザビリティを大事にするので使い勝手もよいし、それが万能薬のようなものでないことも見えてくるだろう。

# 「授業」論と「受業」論

- ▶ オンライン学習においては、授業づくりのコンセプトと発想が問われている。
- ▶ 「授業」論は、コミュニケーション過程が前景化（指導言と学級づくりと教師、人のウェイトが大きい）  
＝掛け図的画一的注入（教え込み）と創造的な一斉授業（練り上げ）の間
- ▶ 「受業」論は、課題遂行過程が前景化（課題設計と学習形態と評価、システムのウェイトが大きい）  
＝手習いの自学（個別化）と学び合い（個性化・協働化）の間
- ▶ 「学ぶ」とは、子どもと世界との個人的、あるいは、協働的な対話の過程であって、「授業」は、その対話的な相互作用を組織化しながら、子どもたちを文化の世界へと手ほどきする営みである。
- ▶ まず「授業」ありきではなく、自学自習の組織化という筋で、学習支援としての「受業」からはじめて「授業」として肉付けしていく。等級制から合級（複式学級）を経て学年学級の成立へ、掛け図（注入）と自学（自力）から教授・学習過程としての授業へという歴史を、発生的にたどり直しながら、授業を捉え直していく。
- ▶ 学び方と手元への着目の重要性。つながりと宛名で質を高める。授業は学びへの導入。



# ICTで学びの質を追求するために

- ▶ 最新テクノロジーで実装して、旧式の学習観に基づく教育（大人数の一斉授業、行動主義的で個人主義的で機械的なドリル学習）を展開することになっていないか？
- ▶ オンライン学習は、良質の課題や問いを軸にした協働的なプロジェクト学習に挑戦する好機かもしれない。質の高くない課題を大量に与えられるために、子どもたちも保護者も疲弊する。逆に、大学などでは、遠隔で課題に取り組ませるようになって、提出される課題の質が上がったという声も耳にする。
- ▶ 仕事や作業の効率を上げるための便利さやスマートさを追求することよりも、教育的価値を高める上では、フラット化を生かして、ホンモノの世界や研究や活動のように、より複合的で、割り切れなさやノイズを含んだ学習や活動にアクセスする機会を拡大する方向性で実装がなされる必要がある（真正の学び（authentic learning）へ）。さらに、コンピュータが教える、あるいは、コンピュータが学習を方向付ける「AI先生」よりも、子どもたちがコンピュータで学び合う、あるいは、子どもとコンピュータが学び合うような、より人間的で主体的なデジタルメディアとの付き合い方が重要である。
- ▶ 「電子黒板、タブレットといった機械が教師の指導や子どもの学習をどうスマートに便利にできるのかということ以上に、デジタルメディアが世界や社会や仕事や生活のあり様や人々の発想にもたらしている革命的な変化のリアル（可能性とリスクの両面）をどう子どもたちに経験させるか、まさに学校の学習の真正性の追求という観点から考えることで、テクノロジーの活用は、効率性、個別性、私事性と結びついた教育の機械化ではなく、学校の学習の文化性、共同性、公共性の再構築につなげることもできるだろう。消費社会的でプライベートなデジタル環境ではなく、職業人や専門家がアクセスしているような、子どもたちの日常生活ではふれる機会の少ない、知的で文化的でパブリックなデジタル環境をこそ学校において保障し、デジタルメディアとのより成熟した付き合い方を学ぶことが大切である」（石井英真2020「『未来の学校』をどう構想するか—『大きな学校』と『小さな学校』の狭間で—」『教育展望』717号、56頁）。

# 表. 学力・学習の質的レベルに対応した課題例、および適合的な教具とメディアの使用法

	教具とメディアの使用法	国語	社会	数学	理科	英語
「知っている・できる」レベル	問題集とドリルプリント AIによる個別最適化学習のためのタブレット	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計器の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りをする。
「わかる」レベル	教科書、黒板とノート、ホワイトボードとワークシート 電子化された教材パッケージ、電子黒板、ノートやホワイトボードやワークシートとしてのタブレット	論説文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテキストの記述から想像する。	扇状地に果樹園が多い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起こるか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適用問題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で説明する。	教科書の本文で書かれている内容を把握し訳す。 設定された場面で、定型的な表現などを使って簡単な会話をする。
「使える」レベル	史・資料、ホンモノの物や人や文献 情報収集・分析・表現やコミュニケーションのツールとしてのタブレット	特定の問題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえながら自分の考えを論説文にまとめる。そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論評する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前のどこに出店すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万本当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題をつくり、追究の過程と結果を数学新聞にまとめる。	クラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けない。その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読んでポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分担して演じ、発表会を行う。

※同じ機能が果たせるのであれば、より原初的な教具に戻して考えてみる。

テクノロジーを生かしたイノベーションというとき、効率性志向の既存の作業や生活のスマート化のみならず、教科の専門性と結び付けて学びの質を高めたり、社会的活動と結び付けてフラット化や民主化につなげたりする視点も重要だろう。